

アサガオ

Japanese morning-glory



学名：Pharbitis nil (ファルビティス ニル)
科 目：Convolvulaceae (ヒルガオ科アサガオ属)
原産地：中国南部から東南アジア

花



初夏に色とりどりの花を咲かせるアサガオ。夏の風物詩として古くから日本人に親しまれ、花姿が涼しさを誘います。

アサガオは俳句の季語にも登場し、各地で開かれる朝顔市が夏の風物詩とされているように、われわれ日本人の生活にはなじみ深く、日本の夏を彩る花として、春のサクラ、秋のキクとともに、古くから親しまれてきました。

しかし、アサガオはもともと日本原産ではなく、奈良時代に中国から入ってきた植物です。当時は花が和歌に詠まれることもありましたが、牽牛子と呼ばれ、観賞用よりも薬用として栽培されることが多く、種子の粉末が下剤や利尿剤として用いられていました。花色は現在のように豊富ではなく、薄青1色のみに限られていました。観賞を目的に栽培されるようになったのは、江戸時代初期に白い花が登場してからで、薄赤・濃青・淡紫・茶・灰色と花色が増えるにつれて人気が高まり、庶民のあいだで広く栽培されるようになりました。また、この時期には茎の伸びない

矮性種があらわれ、同時に花の形が珍しい変化アサガオの栽培が流行しました。

明治時代になると、より大きな花を咲かせるため大輪アサガオの栽培に人気に移り、日本各地で独特の仕立て方が考え出されました。大輪アサガオとは花径20cm以上のものを指し、直径23cmほどのものがつくられたという記録が残っており、現在でも愛好家のあいだで広く栽培されています。

日本で改良されたアサガオ以外では、アメ



真っ白い花が美しい大輪アサガオの園芸品種「白雅」

ア
ア
サ
ガ
オ

| | | |
|------|----------------------------------|----------------------|
| MEMO | 栽培：難易度 ★★☆☆☆ | 開花時期：7月上旬～10月上旬 |
| | 生育温度：20～30℃ | 収穫時期：－ |
| | 手入れ：支柱を立ててつるを誘引する | 高さ：60～200cm |
| | 土：5：4：1 (赤玉土：腐葉土もしくはピートモス：川砂) | 病気・害虫：斑紋病・アカダニ・アブラムシ |

リカアサガオとマルバアサガオを交雑した改良品種が人気で、花の大きさは10cm程度ですが、涼しくなると日中でもたくさんの花をつけるので垣根によく使われています。

栽培ポイント

👉 栽培

種子をまく時期は、気温が20℃以上になる5月上旬～下旬。アサガオの種子は表皮が堅く、そのままくと発芽に時間がかかるため種まきを行う前日に種子の1～2か所をヤスリやカッターなどで傷つけた後、ぬるま湯に一晩浸し、たっぷりと水分を吸収させておきましょう。

鉢植えで栽培する場合は、用土を入れた3号のビニールポットに深さ1～1.5cmぐらいの穴を掘り、種子の先細になっているほうを上に向けて、1穴に1～2粒の割合でまきます。覆土は軽く行い、本葉が4枚になったら、育ちの遅い苗や形の悪いものを間引いて1本仕立てにしましょう。本葉が5～6枚になったら、5～7号鉢に移植して栽培を続けます。その際、鉢の周りを囲むようにして3～5本の支柱を立て、つるをからませます。

いっぼう直まきの場合は、20cm間隔に深さ1～1.5cmぐらいの穴を掘ったあと、1穴に2～3粒ずつ種をまき、本葉が5～6枚になったら間引いて1本だけ残して、垣根につるをはわせ

朝露にぬれるアサガオ。庶民のあいだに普及したのは江戸時代に入ってからとされています。



地植えの場合、子づるを伸ばすと大きく育ち、花や葉が群生します。

ます。

なお、アサガオは大気汚染に敏感なので、交通量などが多い場所での栽培は避け、できるだけ空気のきれいな環境で育てましょう。

🌡️ 生育温度

適温は20～30℃なので、日本の夏の暑さとはくに問題ありません。ただし、種まきを行う5月上旬～下旬には夜間冷え込むことがあるので、育苗中のビニールポットは、夜になったら室内に取り込むようにしましょう。



大輪アサガオの園芸品種。現在でも大輪咲きの栽培は広く行われています。

変化アサガオ

江戸時代に大流行した変化アサガオは、明治の中ごろに栽培が始まった大輪アサガオに押され、それ以降は一般の園芸愛好家のあいだではあまり栽培されていません。栽培がむずかしいこともあります。変化アサガオの品種が固定できないことも栽培を困難にしているようです。変化アサガオの栽培は、変化アサガオから採取した種子を使用するのではなく、その品種を生み出した元の交配組み合わせの親株から得られた種子を使用しなければなりません。この種子から発芽した子葉の形から変化咲きになりそうなものを選び出して、その苗を栽培する方法をとります。つまり、品種交雑の変化咲きの品種のそれぞれの形質の元になる種子が常に必要になるわけです。遺伝学の確立されていない江戸時代にこうした栽培が行われていたことは、世界でも珍しいことだったといえるでしょう。





購入アドバイス

苗を求めるときは、子葉の形がそろっていて、緑の濃いものを選びましょう。また、朝顔市などで行灯づくりの鉢を買うときは、下のほうの葉が枯れているものは避けましょう。花がたくさん咲いているものよりも、つぼみの数が多いもののほうが長く楽しめます。

▲ 土

鉢植えでの育苗の場合は、肥料分のない用土をします。ピートモス8.5、赤玉土1.5の割合で混合すると、水はけも水もちもよく、病気や害虫の心配もありません。ただし、定植に使う鉢の土は、赤玉土5、腐葉土もしくはピートモス4、川砂1の割合のものがおすすめです。

地植えの場合は、土をよく耕し、腐葉土をすき込んで混ぜ合わせます。

🍷 肥料

鉢植えでの育苗時は元肥は必要ありませんが、発芽1週間後にポットの縁に小さじ1杯の乾燥肥料か油かす団子を置肥します。鉢に定植したら、1000倍に薄めた液肥を週に1回与えましょう。さらに、肥料切れにならないように、大さじ1杯の乾燥肥料か油かす団子を前に置肥を行った場所からずらして与えます。地植えの場合は、元肥として油かすを1㎡当たり100gほどすき込んでおけば、追肥はほとんど必要ありません。

どちらの場合も窒素分の多い肥料を与えすぎると葉ばかりが茂って、花が咲かなくなるので注意しましょう。

🪴 植えかえ

一年草なので、基本的に植えかえすることはありません。花が終わって種子を採取したら抜き取ります。



園芸品種「万博輝」。鉢植え栽培では、ビニールポットで育苗し、根が十分に張ってから移植するとよいでしょう。

👉 手入れ

つるが長く伸びるので、支柱を立ててつるをはわせます。また、花つきが悪くならないように、終わった花はこまめに摘み取ります。

☀️ 日照

日光を好むので、できるだけ午前中に日の当たる場所で栽培しましょう。

💧 水やり

種をまく前に、あらかじめ土にたっぷり水を与えておきます。種まき後は発芽するまで水やりは不要で、発芽後は表土が乾いたら水やりします。また、育苗した苗を鉢や露地に移植した直後にも、たっぷりと水を与えます。

水やりは朝夕の涼しい時間帯にしましょう。ただし、夕方以降に水を与えると、生育に悪影響を及ぼすので注意が必要です。

7月下旬～9月上旬の暑い時期は多めにし、表土の乾き具合によっては1日に2回の水やりが必要となります。生育期には水の代わりに1000倍に薄めた液肥を与えてもよいでしょう。ただし、つぼみがつき、開花の1週間前になったら、液肥はやめて水だけを与えます。

| 作業 | 月 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|------|----|---|---|---|---|-----|---|----|---|-----|----|----|----|
| 日照 | ☀️ | | | | | | | 日向 | | | | | |
| 水やり | 💧 | | | | | ふつう | | 多め | | ふつう | | | |
| 肥料 | 🍷 | | | | | | | | | | | | |
| 植えかえ | 🪴 | | | | | | | | | | | | |

🌿 病気対策と害虫防止 🌿

- それほど大きな害を与える病気はありませんが、葉に斑が出て枯れる斑紋病が出ることがあるので、ベンレートなどを噴霧して予防しておくといでしょう。
- アカダニが発生し、吸汁によって株を弱らせることがあります。マラソン乳剤などで駆除するほか、予防として鉢土に殺ダニ剤を10g程度混合しておく効果があります。
- 茎や葉にアブラムシがついたら、マラソン乳剤などで駆除します。予防として鉢土に10g程度のオルトランを混ぜておくといでしょう。

殖やし方

採取した種子を使って殖やします。花が咲き終わって10日ほどすると、中に種子が4~5粒入った丸いさやができます。さやが枯れて茶色になり、はじけそうになったら収穫。日陰で乾燥させ、翌年までビニール袋などに入れて保存するとよいでしょう。

ただし、早い時期に咲いた花の種子を成熟させるとその後の花つきが悪くなるので要注意です。花期の初めは咲き終わった花は摘み取り、種子ができないようにします。また、花期の終わりに採取された種子も栄養が少なく、よい種子とはいえません。翌年の種まき用には、8月中旬ごろ咲いた花から手に入れた種子がベストです。



大輪アサガオの園芸品種「古雅」

あんどん 行灯づくりの手順

行灯づくりは、明治時代中期に大阪で考案され、現在ではアサガオの仕立て方の代表的なものとされています。有名な東京・入谷の朝顔市では1鉢に3株を行灯づくりに仕立てた鉢植えが販売

されていますが、ここでは初心者向けの1本仕立ての行灯づくり（子づるを伸ばして支柱に絡ませる子づる仕立て）を紹介します。以下の手順に従って、挑戦してみましょう。

①



アサガオを仕立てる場合に中心となる作業は茎（本づる）の切断と摘心です。まず、本葉が10枚になったら子葉と下から5~6枚の本葉を残して茎の上部を切り取ります。この作業を行わないと本づるが伸び続け、本葉の脇にある脇芽から出てくる子づるの生長が遅れます。

②



①の作業と同時に上から2~3番目の脇芽を残し、ほかの脇芽を摘み取ります。残した脇芽から出てくる子づるはそのまま伸ばして行灯づくりに使用します。

③



2つの脇芽から伸びた子づるが20cmほどになったら、つぼみの数が多いしっかりしたつるを残し、残りの子づるの茎を切り取ります。このとき、必要に応じて子づるの葉の脇から出ている脇芽を取り除けば、孫づるを伸ばさずに仕立てることができます。

④



残した子づるを左図のように支柱に絡ませていきます。アサガオのつるは左まきなので、つるを左にはわせるのがポイントです。先端が一番上の段に達したら先端を切りつめ、針金や紐で固定しましょう。つぼみから花が次々と咲きますが、花の咲きがらをそのままにしておくと花つきが悪くなります。なるべく早めに取り除くようにします。

- ↑ 脇芽を伸ばす
- × 脇芽を摘み取る
- ✂ 茎やツルを切り取る